穹蒼高く夜は深く 沈黙の杜に聳えたつ

北斗の冴に君見ずやほくと 「吾が若人よ汝が野心 の梢指すところ

われにかも似て崇くあれ

六片の花咲くところ 荒ぶ吹雪のもだすとき

身を練り魂を磨かずや」 塞つる力を君よ知れ 皎たる天地塵絶えて 「吾が若人よ北の曠野に

十ついちの 美しき国の自治の家に の春今日来る

祝歌たかく君歌へ 住家よ永に栄あれ 「迪に恵ふ若人の」 なる

谷に間ま の若葉に陽はこぼる の百合の香 のゆらぎ

自じ 由っ 時ゕ 鐘ね 春の息吹に渡り行く 「吾が若人よ石狩は の郷土ぞ幸多き」 の響に君よ聴け

崇きのぞみを星に懸け たか

Ŧi.

百鳥歌ひ花は笑む

吾若き力強ければ 健児が行手遠けれど 鐘に自由を学びつつ 真理を求むる一百のまこと

など 贏 ざる事あらん む秋は近からむ